

あしたの忘れ物

Good night, Ricky
Written by Masaki Tsu

津 雅樹



A KAGEFUMI
SCIENCE FICTION SERIES

|A KAGEFUMI SCIENCE FICTION SERIES|

あしたの忘れ物

津 雅樹

Good night, Ricky
by
Msaki TSU 2017
(original version was wirtten in 2005)

cover design and art direction
by
Matthew A. KEITH
(t. m. production)

僕は未来を創り出してる 過去へと向かいさかのぼる

吉田美奈子 作詞、山下達郎 作曲「夏への扉」より一部抜粋

そのバス停は、秋の涼しさが訪れはじめたS県の山中にあった。車一台がどうにか通れるほどの道路脇に、半ば忘れ去られたようにぽつんと立っているバス停だ。

そばのガードレールから身を乗り出せば、源流に近いであろう川のせせらぎを眺め下ろすことができる、振り返れば、この山中にある山城の遺跡へと通じる登山道が、控えめに木立のなかに伸びていた。

そんなバス停の傍らに、二十歳前後であろうか、デニムのジャケットとズボン姿の若い女がひとり佇んでいた。彼女は右肩に担いでいたぎゅうぎゅうのナップザックを足許に置くと、左手首にはめた腕時計に目をやった。もうじき、ここにバスがやってくるはずなのだ。心地よい風が、その首筋の辺りまで伸ばされた短めの髪を、サラサラと揺らした。

彼女は大きく伸びをして、息を吸い込んだ。秋晴れの空の下、山の清々しいひんやりとした空気が、肺を満たしてゆく。

ああ、なんて気持ちがいいのだろう。こんなにすっきりとした気分は久しぶり。天気もいいし、今日は絶好の日和ね。

そんなことを考えながら腕を下ろしたとき、三メートルほど向こう、ガードレール下の草陰に、きらりと輝くものがあつた。

「……なんだろう？」

彼女がそこまで駆けて行ってしゃがんでみると、そこには紫色の鉱石らしきものが転がっていた。それを拾い上げて、しげしげと眺めてみる。それは、およそ二・五センチメートルほどの楕円形で、表面に一箇所亀裂のような傷がある以外、まるで研磨したかのように滑らかだった。

「もしかして紫水晶かな」

陽にかざしてみると、それは非常に透明度が高く、彼女の眼前に紫色の淡い光が広がった。幸運のお守りになるかもしれない。だって今日は、わたしにとって二重に大事な日なのだもの。

彼女がそれをジャケットのポケットにしまったとき、ちょうど待っていたバスが道の向こ

うから、のらりくらりとやってきていた。

○

一九九八年といえ、消費税が三パーセントから五パーセントに引き上げられた翌年で、ニューヨークにはまだ世界貿易センター・ビルがたたずんでいた。コソヴォでは紛争が勃発したり、インドとパキスタンでは地下で核実験をやらけたりで新聞を騒がしていた。巷では、アメリカ版『ゴジラ』がブルックリン・ブリッジにからまりながら酷評を浴び、そして翌年の夏に控えてオカルト界が沸き立っていたふうに思う。

僕はというと相変わらずの日と見て、SF——とくにこの頃はSF小説——浸りの日々を送っていたような気がする。お定まりのクラークからはじまってディック、ハインライン、クライトン、アシモフ、フィニイにヤング、小松左京から筒井康隆、星新一、広瀬正、平井和正、梶尾真治、エトセトラ、エトセトラ……と、とにかく見境なく読みまくっていた。

SFだけかという、そうではなく、大学生という時間だけはたっぷり持て余していた身分だったためか、少々遅ればせながら人生ではじめて女性に惚れていた。しかし、この「惚れる」というのは「もてる」というのとは全然違うことであり、SF的に喩えるなら「タイ

ムトリップとタイムリープ」くらい——あるいは、僕の友人でルパン三世大好き人間のそいつに言わせれば「山田康雄と栗田貫一」くらい——違うということになるのだらうか。とにかく、その世にいうところの「初恋」は、ものの見事に岡惚れの失恋に終わった。はじめて感じた甘くもどかしい心のきらめきは、瞬く間に吹き消されてしまったのだった。その結果として、僕は心に手ひどい傷を受けてしまったのである。

この世に生を受けてから両手両足の指の数だけ齡を重ねてはじめての失恋とあって、その衝撃と苦痛は計り知れなかった。その痛みからなんとか逃れようと、まだ呑み慣れない酒をアパートでひとりあおっては泥酔して万年床に倒れ伏し、総髪をかきむしっては幾ばくかの髪の毛を板張りの床に散らした。穴があるならすぐにでも隠遁し、そのまま誰にも省みられずに年金で孤独に暮らしたいなあと切に願った。やがて日本を半周できようかというくらいに寝返りを打ちまくった挙句、僕は旅に出ることにしたのだった。

もし、僕がそれまでに人並みの人生経験を積んでいたならば、あるいは荒みきったこの精神状態を正常復帰させるのに相応しい別の方法を思いついたかもしれない。しかし、僕の人生経験の底が見えるほどの浅さと、ちょうどバイトの給料が入った直後というタイミングもあって、せつかくなら感傷旅行とやらもオツではないかと軽卒に決め込んだ結果であった。

そういうわけで、十月半ばの一週間の講義を自主休講と決め込み、リュックサックひとつ

で電車に飛び乗ると、見知らぬ土地をめったやたらと歩きまわっては、その土地その土地で安宿に泊まって数日を過ごした。

そして、当初の目的であった失恋の傷と、目先の現実問題としての路銀が共に消え果てる寸前となった今日この頃、僕はS県のなかほどにある山村にあり、その村に唯一あるバス停に向けて川の土手沿いの一本道をのろのろと歩いていたわけである。そこからバスに乗って最寄りのJR駅を目指し、帰路につこうというわけだ。

僕がいま通り過ぎようとするこの村は、四方を山々に囲まれたなかにぽっかり開けたような、こぢんまりとした平地にあった。右手——川の向こう岸——を見れば、すぐに急な山の斜面が陣取っていて、反対に前後と左手を見れば、向こうに見える山の裾野まで適度に小分けされた田んぼやら畑やらが広がっていて、そのあいだにポツポツと人家の集まりがある。それらを、ほっそりとした道と電線がつないでいるのだ。まさに古き良き日本の原風景。箱庭にして、パックで売っていいような感じである。

バス停まであと百メートルほどのところで、僕は立ち止まって空を仰いだ。よく晴れた空は、そろそろ茜色に染まろうかという頃合で、見上げる僕の視界のなかを赤とんぼが数匹、優雅に横切っていた。そして目を閉じると、ほんのりとやわらかな風が、僕の頬をなぞた。「もうすっかり秋だなあ」と、僕がひとりごちながら視点を前に戻すと、目的のバスが向こ

うからのろのろとやってきていた。

こりゃいかん！

と、僕はにわかに駆け足になった。慌ただしく上下に揺れる景色のなかで、バスは不必要なほどにゆったりとバス停に停車した。

しめた、間に合うぞ。

僕は速くもない足に鞭打って、必死に速度を上げた。それにしても——僕はそのバスを眺めた——くすんだオレンジ色の屋根が特徴的な……なんとも古めかしい、時代錯誤^{アナクロ}もいいところではないか。本当にあれで山道を越えられるのかしらん。まあいい。とにかく走れ、走れ。こんなタイミングで乗り遅れても馬鹿らしいではないか。

荒い息を吐きながら走ることも十数秒、バスまであと二十歩というところで、バスからひとりの乗客が降りてきたのが目に入った。しかし、その乗客は足を滑らせたのか、あろうことか土手の下へ落っこちてしまったのだ。

こりゃいかん！

と、僕は咄嗟に方向を変えた。二メートルほどの高低差のある草に覆われた急な斜面を、僕はその乗客の二の舞にならないよう注意しながら滑り降りた。その人は派手に尻餅をついたらしく、その場に座り込んで腰のあたりをさすっているのが見えた。はたして大丈夫なの

だろうか。

しかし、見たところ大した怪我はなさそうだった。土手一帯がコンクリートや岩石などではなく、やわらかい土に茂った草むらだったのが幸いしたらしい。

おたおたと斜面を降り切ってから、僕が憐れな乗客に近づこうしたとき、右足でなにかを蹴飛ばした。はてなと思ってそれが転がった先を見ると、草に紛れて紫色の楕円形のものが転がっていたので、僕はそれを無意識のうちに拾い上げた。それは二・五センチメートルほどの大きさで、滑らかで透明度の高いその表面に、傷がひとつ目についた。紫水晶だろうか。

「あもう、大丈夫ですか？」

と、僕が拾得物の観察もそこそこに、乗客に息も絶え絶えの声をかけたときだった。まるでそれを見計らったかのように、土手の上からソソソと重たい音が聞こえてきた。バスが、非情にも僕を置いて走り去っていったのだ。

あーあ。僕はため息をつきつつ、徐々に小さくなつてゆくバスの排気音を見送った。運転手が、こんな至近距離で乗客が土手下に落ちたことにどうして気がつかなかったのか、甚だ疑問ではあるけれど、こうなつては仕方がない。それより乗客は大丈夫だろうか。僕がそちらへ向き直ると、その乗客はなんとか立ち上がって、こちらに振り向こうとしているところだった。

「……ええ、大丈夫です。いたた……」

僕にそう返した乗客は、高校生か大学生くらいに見える若い女性だった。華奢な体軀に身につけたデニム生地ジャケットとズボンについた汚れをはらいながら、彼女は顔をこちらに向けた。細面の端正な顔立ちにある知的で大きな瞳が印象的で、首筋まで伸ばされた短めの髪がよく似合っていた。端的に言って、美少女であった。

「怪我は？」と僕が尋ねると、彼女は首を横に振った。

「ごめんなさい。びつくりしたでしょう？」彼女は、恥ずかしそうに笑みを浮かべ、照れ隠しに頭をかいた。「おっちょこちよいでイヤになっちゃう」

「いえ」僕は、彼女の表情を見て、ホッと安心した。「大したことがなくて、よかったですよ」
「ところで、つかぬことをお伺いするのですが……」

と、彼女が言った。僕は内心、道を尋ねられたらどうしようかと冷や冷やした。この村は、単に帰りの道中に過ぎないのだ。

「あの、それ」

と、続けて彼女は、僕の右手を指差して言った。さっき拾った紫水晶と思しき物体が、掌に乗ったままの右手だ。

「あ、これ君の？」僕は慌ててそれを彼女に手渡した。「すみません。いや、そこに落ちて

いたものだから」

「どうも」彼女は小さくお辞儀をしながら受け取った。「さっきのバスに乗る前、待っていたバス停のそばで見つけたんです。もしかして紫水晶なら、わたし、二月生まれなものですから、お守りにならないかと思ひまして」

彼女はそう言うのと、その紫水晶を大事そうにジャケットのポケットにしまった。

「ところで、もうひとつだけ、つかぬことをお尋ねしますが……」

「はあ」

と曖昧に頷きながら、僕は今度こそ本当に道を尋ねられるのではないだろうな、と無意味にビクついていた。こんな旅の空の下でまで「役立たず」の烙印なぞ押されたくはなかった。「もしかして、いまのバスに乘ろうとされていましたか」

「ええ、まあ……」僕は、その懸念が杞憂に終わったことに胸をなでおろした。「もう行ってしまったし、次の便までのんびり待ちますよ」

そう僕が答えているあいだに、彼女の表情が徐々に変化しているの気がついた。そして、僕が喋り終わる頃には、なにかこう、たいへんなことをした、という苦々しい表情になっていた。

「あのう……」彼女は言いにくそうに続けた。「あのバスが今日の最終便……だったのです」

……。つまりその、明日までバスはもう来ないのではないかと……」

「え……？」

思わず声が出てしまった。つい先ほど、無慈悲にも僕らのそばを走り去ったあのバスが今日の最終便だったというのか？　ここから先は、川沿いに延々と山道が続こうかというのに、肝心の移動手段が潰えてしまったというのか。いまの時間からでは、明るいうちに徒歩で次の人里に出るのはほぼ、いや確実に絶望だ。地図で見た限り、車でも一時間はかかる距離である。冗談ではない。まだ午後五時過ぎだから次のバスくらいあるだろうなんて……甘かった。宿に泊まるうにも——僕はズボンのポケットにある財布をあぐた検めた——金銭的余裕は、まったくくない。神も仏もないのか。はて、どうする？　このまま歩いて闇夜の山越えと洒落込むか？　それともこのバス停で野宿を敢行して朝を待とうか？　どうする？　どうする？

「……のう、もし……」

ん？　どこかでなんだか声が聞こえるぞ。聞き覚えのあるような、ないような……いや、そんなことよりもいま問われるべきは、これからの自身の進退である。どうする？　どうしよう？

「あの！」

その声にハタとしてそちらを向くと、例の彼女が、僕の近くに立っているのだった。どう

やら、僕の脳内をこれでもかといわんばかりに渦巻いていた（クスチョン・マーク）のせいで、しばらく彼女が自分を呼んでいたことに気がつかなかったらしい。

「はい……？」

と、僕はようやく答えた。

「もしよかったら、宿ご一緒しませんか？ 実は、この村の外れにある小さな温泉旅館をとつてあるんです」

いきなり彼女から出された提案に、僕は心底慌てた。

「いや、しかし……」

「今日、本当は友達とふたりで来る予定だったんです。でも、昨日きのうになって、その友達が風邪をこじらせて来られなくなってしまうて……。だから、ひとり分空きがあるんです」

「しかし恥ずかしながら、そのう、いま金銭的余裕が帰りの交通費くらいしかないのです

……」

あたふたする僕の言葉をさえぎるように、彼女はもう一步僕に近づいた。

「それなら心配しないで。ことの起こりは全部、わたしのドジが悪いんですから。それに——」
彼女は素早く僕の見てくれを観察した。「見たところ、この辺りの人じゃないんでしょう？」

「それにしても、そこまで甘えるわけには……」

僕はおろおろと、なんとか辞退の言葉を捻り出そうとした。たしかに僕の置かれた現在の事態は深刻であり、それを作り出した原因は当の本人が言うとおり彼女かもしれない。しかし、よしんばそれにしたって、ゆきずりに宿まで奢ってもらうのは、それも初対面の女性にというのは、いかがなものかと思ったのだ。

しかし、彼女はすっかり自分のなかで結論を出したようで、いまにも「さあ」と、僕の腕を引っ張って行かんとせんばかりに、にっこりと微笑んでいた。僕はといえば、辞退の決定打になるような言葉を探り当てようと、金魚よろしく口をパクパクさせるのが関の山だった。「さあ、もう暗くなりますよ。野宿をするわけにもいかないし、わたしもさせたくはありません。旅は道づれ、というではありませんか。ね？ さっ、行きましょう」

そう言うと、彼女はくると身体の向きを変え、近くに転がっていたぎゅうぎゅうのナツプザックを拾い上げて、草に覆われた土手の急斜面を元氣よく登りはじめた。そんな彼女の姿をぼうつと眺めながら、僕の脳裏では〈クエスチョン・マーク〉が再び螺旋を描きはじめていた。どうしたことか、えらいことになってしまった、このまま立ち去ってしまおうか、いや、だが、しかし、うんともすんとも……？

「あの！」

土手を登り終えた彼女が僕を呼んだ。

僕は思わずビクリとして、すこし上ずった声で「はい」と、返事をした。

「お名前、なんていうんですか？」彼女が、すこし前かがみになって尋ねた。「まだ、お聞きしてなかったですよね」

「あ、ええと、武田……武田俊明だけど……」

僕がそう答えると、彼女はそれを確認するように頷いた。

「いいお名前ですね。わたしは、香月裕美といいます。よろしく」

それから彼女は僕に向かって、二度三度「早く早く」と手招きをした。

僕は逡巡した。

しかし彼女はといえば、掌を膝にやって前かがみになったまま、なんともやさしげに微笑んで、僕を待っていた。

それを見て、僕は観念した。そして、土手を登りはじめた。もうこうなったら乗りかかった船だ。それに多少なりとも、この香月裕美という女性に興味を抱いたのは否定できなかった。僕は土手を登りながら「いい名前だ」と、ひとり心のなかで呟いたのだった。

山々の隙間から覗く空に夜の帳とばりが降りはじめ、その色合いを穏やかな濃紺へと塗り替えてゆくなか、僕らは会話もなく歩いた。とくに仲よく並んでというわけでもなく、裕美と名乗った見知らぬ女性は、僕の前、五歩ほど前を颯爽と進んだ。僕はといえば頭を下に垂れ、その後ろを金魚のフンのようについて行くしかできなかった。

歩くうち、質素な木製の電柱にくくりつけられた外灯が燈り、家々からもまばらに明かりが漏れだした。自転車に乗った子供たちがにぎやかに通り過ぎ、どこからともなく虫おの音が聞こえてきた。

しかし、一度は吹っ切れたものの、本当にこんなことでよいのだろうか。なんだか情けないなあ。やはり、丁寧に断るべきなのだろうか。いや、それ以前に、すなわち断るにせよ断らないにせよ、なにかしら話しかけたほうがよいのではなからうか。名前以外の素性が知れないのはお互い様なのだし、とはいえ、これから宿を共にしようというのだから、そうとあつては多少の個人的な情報交換があつたほうが気も落ち着こうというものではないかと思われるが、しかし、いま彼女に話しかけるのが得策であるかどうかとも判断がつかないし、うんたらかんたら……。

……………。

ああ、なんて僕はこう優柔不断でどうしようもない野郎なのだろうか。おまけにひより癖

もあり、極度の緊張しいでもある。いいとこなしだ。まことに情けないことであると自己評価まではできるのだが、なかなか直らないやつかいな短所である。だが、短所は乗り越えるためにあるのではなかったか。うむ。もうどうにでもなれだ。ウジウジしていても仕方がない。我が敬愛するキーティング先生も「カーペ・^{いまを}・^{生きよ}・ダイエム」と仰っていたではないか。よし、なんでもいいからとにかく話そう。お互い、名前しか知らないのではどうしようもないではないか。

僕は頭をもたげた。そして、さあ話そうと口を開いたそのとき、裕美の足が止まった。

「武田さん、ここです。着きましたよ」

彼女は、こちらに振り向いてそう言った。

「あ、はあ……」

どうやら、優柔不断は損かしらないらしい。話す機会を失ってしまった。

「さ、早く入りましょう」

そう言うのと、裕美はきびすを返してまた歩き出した。

慌てて彼女を追いながら見ると、山の斜面のそばに佇むその旅館は、なかなか趣のある木造建築だった。軒先に掛かっている藍色の暖簾には、白い達筆な筆で〈温泉旅館・妙得庵〉とあった。

裕美は入り口の戸をからからと開けると、宿の奥に向かつて「こんばんは」と声をかけた。僕が彼女について入り口をくぐり、戸を後ろ手に閉めていると、廊下の奥から旅館の女将らしき女性がパタパタと駆けてきた。人のよさそうな小太りなおばさんだ。

「いらつしやいませ。さぞ、お疲れでしょう」

女将は一礼してそう言うと、僕らに下駄箱からスリッパを出してくれた。

「ごめんなさい。すっかり遅くなってしまつて」

と、裕美が言つた。

「いえいえ、お氣になさらず」

「予約していた香月です」

「はい、承っております。さ、こちらへどうぞ」そう言いながら、女将は下足場から左手前に見えていた受付の小部屋へ入り、その部屋の窓越しにあるカウンターに冊子を置いた。「お手数ですが、こちらにご記名いただけますか？」

裕美は「はい」と返事をしながら靴をスリッパに履き替え、カウンターに向かった。彼女は女将と二言三言交わしながら、記帳をはじめた

そのあいだ僕は靴も履き替えず、その場でぐるりと宿のロビーを見回していた。外観どおりの日本的な建築様式で、屈強な丸太柱に白壁が美しく、なかなか歴史の古そうな宿だった。

僕のこれまで泊まった安宿とは風情が違う、立派なものだ。暖色のやわらかい照明と下駄箱の上に飾られた生け花に、心が和んだ。

「俊明！」

唐突に自分の名前を呼ばれたことに驚いた僕は、慌てて呼び声の主を探した。それは裕美だった。

「なにボンヤリしてるの？ さ、ほら早く靴を脱いで。行くよ」

彼女は記帳をとうに終え、女将について部屋へ行こうとしていたようだ。腕を振って、僕を急かすように促している。

「あ、は、はい」

僕は慌てて靴をスリッパに履き替えると、よたよたと彼女のあとを追った。

それにしても、先ほどはどうしたことだろう。先ほどまで丁寧に話してくれていた裕美の口調とは打って変わっての荒い言葉遣いに、突然に呼び捨て。しかも下の名前をである。いったい、どうしたというのだろうか。

女将と裕美に従って廊下を歩き、少々急な階段を二階に上がるあいだ、僕はそんなことを考えながら歩いていたので、おそらく必要以上に縮こまった体勢だったに違いない。階段から廊下へ出て、左手に連なる大きな窓の向こうに旅館のすぐ裏にある山の木立を見ながら十

歩ほど歩いたとき、「こちらでございます」と言う女将の声が聞こえた。

女将は部屋の明かりを灯し、僕らをなかへ通してくれた。部屋の戸をくぐってすぐに小さな踊り場があり、そこでスリッパを脱ぐ。一メートルほどの短い板張りの廊下があつて、十畳ほどの広さの畳が敷かれたひと間に出た。中央には、つややかな木材で作られたシックな色合いの机と、その両側に向かい合うように座椅子が置かれていた。部屋の奥に設置された書院造り風の床の間には、ねずみ色の花瓶にささった白い花——僕は、この手のジャンルに弱いので、なんという花かまでは判らなかつた——と、山間の風景が描かれた掛け軸が飾つてあつた。

僕らが部屋に入つたのを見届けてから、女将は「それではごゆっくり」と深々と頭を下げて廊下を駆け去つた。

女将の足音が行つてしまうと、裕美は手に持っていたナツプザックを畳の上に無造作に投げ出した。裕美の言葉遣いが急変したこともあつて、僕はその音に必要以上にびっくりしてしまつた。そんな僕を一瞬不思議そうな瞳で彼女は見ると、ほんのすこし微笑んだ。

「突然呼び捨てにしたりして、ごめんなさい。驚いたでしょう？」

僕はきよとした。またしても唐突に彼女の口調が元に戻つたからだ。

「ええ……」僕はギクシャクと頷いた。「すこしばかり」

「実は、さっきあなたのことを、わたしの弟だつてことにして記帳したんです。連れのこと
は旅館には言っていなかったので咄嗟に」

「ああ、なるほど」

「だから、さっきのは演技なんです」裕美は申し訳なさそうに言った。「気にしないでくだ
さいね」

「もちろん」

僕は、微笑んでみせた。すると、安心したように、彼女の顔から心配そうな表情は消えた。
「でも、偽名を使うなんてはじめて。すこしドギマギしちゃった」裕美はおかしそうに笑う
と、くるりと身を翻して、押入れへと向かった。「先にお風呂に行きませんか？ あと四十
分ほどで、夕食は来るそうですから」

僕が頷きながら自分の腕時計に目をやると、時間は六時十五分を指していた。

「この旅館の露天風呂は隠れた穴場として有名ならしいので——」彼女は、ふたり分の浴衣や
タオルを取り出しながら続けた。「楽しみにしてきました」

「へえ、そうなんだ」

「あれ、知らなかったんですか」

「はあ。日和見で旅行していたものだから……」

「どうぞ」と言つて、裕美が浴衣とタオルを渡してくれた。

「あ、ありがとう」

「日と見で旅行かあ。なんだか素敵ですね」彼女は自分の浴衣類を片手に持って、押入れの襖を開めると、すこし考える仕草をした。「ひよつとして、感傷旅行ですか？ 原因は……失恋かしら」

裕美はそうつけ加えて、いたずらっぽい笑みを浮かべた。いうまでもなく凶星を突かれた僕はグツと息を呑み込んだ。なんと鋭いことであろうか。

「あ、はは、はあ」

かくのごとく言い当てられてはどうすることもできず、僕は背中がムズがゆくするような気恥ずかしさを感じながら、呑み込んだ息を力ない笑いとして吐き出して誤魔化した。そして、僕はこの話題を打ち切るために、「さて……」と切り出した。

「それじゃあ、ひとつ風呂浴びるとしますか。姉さん」

僕は、いま思いつく限りのジョークを交えて言つた。それがすこしばかりウケたのか、彼女はにっこりと笑つて「はい」と頷いた。

それを見た僕は途端にうれしくなり、そのまま意気揚々と部屋を出ようとした。すると、裕美が僕を呼び止めた。

「あの、もうリュックは置いていてもいいんじゃないですか？」

その言葉にハツとして自分の肩を見ると、たしかに僕のリュックはしっかりとそこにあった。ずっと背負いつぱなしのままだったのだ。

「あ！」と、僕は慌ててリュックサックを下ろした。裕美のほうを見ると、彼女は必死に笑いをこらえようとしているようだった。僕は赤面して、またしても誤魔化し笑いをする羽目になってしまったのだ。

僕は、自分の間抜けさを呪った。

裕美と浴場の入り口で別れて露天風呂に出ると、空はすっかりに暗くなっていた。風呂場にはちやうどガラ空きで、僕以外には誰もいなかった。あるいは、僕ら以外に誰も宿泊客がないのかもしれない、とも思った。いまのところ、廊下などでも誰ともすれ違っていないし、ほかの部屋に人がいるような気配はなかったからだ。彼女の言うとおり、ここは本当に隠れた穴場なのかもしれない。

すこし肌寒い風がそろりと通り過ぎたので、僕はいそいそと湯船に浸かることとした。暗い色の、大きなごつごつとした岩で作られた露天風呂に張られた湯に身体をゆっくり沈めてゆくと、これまでの旅の疲れがにじみ出て行くような気がした。なんともなしに、大きなため息が出る。

いい湯だ。

そのまま頭を後ろの岩に預け、僕は竹の柵で切り取られた夜空を眺めた。小さく、星があらちろこちらに見える。目を閉じると、旅館の裏の木立を風がほのかに揺らすざわめきと、湯船に落ちる掛け流しのせせらぎが奏でる絶妙なハーモニーが耳をくすぐった。旅館の造りと同様に、たいへん風情があつた。そんな露天風呂にひとり浸かっていると、うーむ、なんとも贅沢である。

それにしても、人助けとはするものだな。といって、なにをしたわけではないけれども、そのおかげで、路頭に迷うこともなく、こんな旅館にも泊まらせてもらえたのだ。しかし、こんなにしてもらいながら、いまの自分には恩のひとつも彼女に返せないことが、むなしく感じられた。

大きなため息を、もうひとつ。

それにしても、あの香月裕美と名乗る女性は、どういった人物なのだろうか。年齢的に自分と同じような学生かしら。だとしたら、こんな半端な時期に——自主休講を決め込んだ僕が言えた義理ではないけれど——旅行などするだろうか。社会人、あるいはフリーター、もしくは放浪癖のフリーテン娘？　そもそも冷静に考えてみれば、いくらなんらかの理由があつたとはいえ、赤の他人を——なかんずく素性の知らぬ男を——宿の同室に誘うものだろうか。

なにか間違いが——僕は決して起こすつもりもなければ、それ以前に度胸もないが——起こつたらどうするとか。善意の塊のような性格なのか、それとも単に奔放なのか。しかし、なかなか知的な瞳をしていたし、喋り方だって……。

本日これで何度目になるだろうか、ヘクエスチョン・マークがまたもや僕の脳内を駆け巡り、埋め尽くした。

そのとき、柵の向こう側にある女湯のほうから風呂場の扉の開く音が聞こえてきた。おそらく裕美が露天へと出てきたのであろうか。続いて、人が湯船にそつと浸かる小さな音が入り込んでくる。

すると、いままであれこれ彼女のことを考えていたことが急に恥ずかしくなってしまうて、僕は慌てて湯船から出た。それから、そそくさと内風呂に引っ込んでさっさと身体を洗ってしまい、早々に風呂場をあとにした。

○

部屋に戻ってみると、まだ裕美は帰ってきていなかった。彼女が風呂場に出てくる音を聞いて、すたこらと帰ってきたのだから、当然といえば当然だろう。僕らが一緒に部屋を出て

から、まだ十分ほどしか経っていない。

僕はおもむろに畳に腰掛けると、につつき自分のリュックサックをたぐり寄せて、そのなかから一冊の本を取り出した。現在、読みかけの本——ハヤカワSF文庫、ロバート・A・ハインライン著『夏への扉』である。彼女が帰ってくるまでのあいだ、読もうと思ったのだ。取り出すと早速、葉を挟んでおいたページを開いて、しげしげと読みはじめた。

夢中になって六十ページほど読み進んだとき、コンコンと戸を叩く音が聞こえ、次いで戸が開いた。

「あ、お帰りなさい」

入ってきたのは、浴衣姿の裕美だった。僕は一瞬、無意識のうちに彼女に見とれていた。まだ乾ききっていない髪が、とても色つぼく映ったのだ。

「はやかったんですね」

彼女はそう言いながら、先程まで着ていた衣服をナツプザックにしまつて部屋の隅にやつた。するとまた、戸を叩くコンコンという音が聞こえた。

「はい」と、裕美が返事をする。

「失礼いたします。夕食をお持ちいたしました」

先ほどの女将の声だった。それから戸がゆつくりと開き、女将が女中とふたりで部屋に入っ

てくると、机の上に僕らの夕食を手際よく並べていった。卓上の料理からは、なんとも食欲をそそる香りが漂ってきていた。

「ごゆっくりどうぞ」

と、女将と女中が頭を下げ、部屋から出て行こうとした。

「あ、女将さん」と、それを裕美が呼び止めた。「ビールあります？」

「はい、ございますよ。麒麟でよろしければ」

「二本いただけますか。グラスもふたつ」

「かしこまりました。すぐにお持ちしますね」

「ありがとうございます」

「いえいえ。では、ごゆっくり」

そう言つて、女将はもう一度頭を下げると、女中を連れてパタパタと去つていった。

まもなく、ひとりの女中が盆にビール瓶を二本とグラスをふたつ、そして栓抜きを載せてやつてきた。裕美がそれを受け取つて女中に礼を言っているあいだに、僕は読んでいた『夏への扉』をリュックサックへしまい、裕美のナップザックのそばに置いた。

僕が自分の座椅子に座ったとき、彼女は一本目のビールを栓抜きで開けにかかっていた。卓上の料理を眺めてみると、そこには山菜おこわ、川魚の塩焼き、天ぷら、吸い物、酢の物、

そしてきゅうりや白菜などの漬物が並んでいた。どれも実においしそうだ。

そこへ、スツと裕美がグラスを僕に差し出した。僕がグラスを受け取ると、彼女はそんなにビールを注ぎ、次いで自分のグラスもビールで満たした。そして、彼女はグラスを持ち上げて、無言で乾杯を促した。僕はそれに従い、グラスを彼女のそれに近づけると、彼女がグラスをちょこつと傾けて、静かに乾杯した。「キン」と、グラス同士の触れる音が控えめに鳴った。それから彼女は、ひと息にグラスのビールを飲み干すと、フーツと息をついた。

「ああ、おいしい」

と言ったあと、彼女はきよとした表情で僕のほうを見た。僕がグラスを手を持ったまま、じっとしていたからだ。

「もしかして、お酒、だめでした？」

「いや……その」そういうわけではなく、例によって僕はもじもじと彼女に気兼ねしてしまつたのだった。「そういうわけでは、ないんだけど……」

そんな僕の内心を読み取ったように、彼女は「さあ」と言つて、にこりと笑つた。

「遠慮なく、どうぞ」

僕は自分の卑屈さが、彼女にかえつて気を遣わせてしまったことを反省した。

「それじゃあ……」と言つてから僕はグラスを空にし、卓上に置いた。

裕美はそれを見届けると、お互いのグラスにもう一度ビールを満たし、箸を取った。

「さて、いただきますよ」

彼女に続くように僕は箸を取って、吸い物をひと口すすり、次いでおこわを口に運んだ。噛みしめると素朴な味わいが口に拡がって——旅の疲れもあったのだろう——たいへん美味だった。僕がふた口目を口にしたとき、同じくおこわを美味しそうに食べていた裕美が言った。

「ねえ。さっきまで読んでいたのは、なんですか？」

「え、ああ……」とりあえず僕はおこわを飲み込んだ。「さっきの本は、ロバート・A・ハインラインが書いた『夏への扉』というSF小説だよ」

「どんな話なんですか？」

「ええと、……若くて優秀な発明家の青年が友人たちに騙された挙句、コールド・スリープで三十年後の未来まで飛ばされてしまう。その青年は、そのまま未来で暮らすようになるんだけど、ある日、自分が元の時代へ帰る方法があることを知るんだね。それというのが、世間では異端視されている大学教授が発明しているというタイムマシンを使って……と、僕もまだ読みかけだから、ここまでしか知らないんだ」

「面白そうですね」

裕美はこの『夏への扉』に興味を持ってくれたようだ。少なくとも、儀礼的な反応ではない。僕はそれがとてもうれしかった。

なぜかという、僕のまわりの人間は、どうもSFというジャンルをある種のゲテモノ扱いしているフシがあったからだ。僕はかなり熱烈的なSFファンであつたし、それを自認していたけれども、たまに友人や知人にSFの話をしようものなら、誰も彼もがまるで申し合わせたかのように、僕を軽蔑の白い眼差しで眺めるのである。

その視線のなかでなお堂々としていられるほど、僕の性格は屈強ではないので、すぐさまいたたまれない気分になり、一刻も早くその場から逃げ出したくなるが常だったのだ。おそらく、SF小説なぞ——とくに海外のものなどみんな読みもしなければ興味もないのだろう。しかし、いまはどうだ？

「山下達郎って歌手、知ってる？」

僕がそう尋ねると、裕美は塩焼きの魚を箸で突きつつ頷いた。

「はい」彼女は、なぜ急に話題が変わったのだろうと、不思議そうな表情になった。「知ってます」

「山下達郎も、この『夏への扉』を元に歌を作っているんだよ」

「えっ、あの『夏への扉』って曲、その小説が元だったんですか？」

「あれ、その歌を知ってるの？」

「ええ。＼だからリッキー ティッキ タビー その日まで おやすみ＼ ってやつでしょう？」彼女はその曲の一節をサラリと再現してみた。「父が好きなんですよ、山下達郎。もう、カー・ステレオで流れっぱなしなくらい。そうやって小さい頃から聞いてきたせいかしら、わたしもけっこう好きなんです。現実の夏は暑くて嫌いですけど、彼の歌う夏を聞くのは、なんだか心地よくて」

なんと。

うれしいことがまたひとつ。彼女も山下達郎を知っている。しかも、けっこう好きという。なにを隠そう、僕は山下達郎の大ファンなのだ。これまた、僕のまわりの人間に言わせれば、マイナーで面白い趣味ということにされていたのだ。

「なら……」と、裕美は僕に聞いてきた。「＼そしてピートと連れ立って＼ っていうところの、＼ピート＼ って誰のことなんですか？」

「主人公の飼っている猫のことだよ」

「へえ！ そうなんですか」裕美は、長年の謎が解けたというふうにはポンと手を叩いた。「じゃあ、＼リッキー ティッキ タビー＼ は？」

「主人公と仲がいい小さな女の子のニック・ネーム」

「キャラクターの名前だったんですね」裕美は目を輝かせた。「てっきり、おまじないの言葉だとばかり」

それから食事のあいだ、僕らは山下達郎の話題で盛り上がった。思えば、はじめて見つかった共通の話題だ。

食事が終わり、山下達郎に関する討議が終わった場合に、女中が食事を下げにやってきた。

「ところで、武田さんはSFをよく読まれるんですか？」

女中が行ったあと、空いたグラスにビールを注ぎなおしながら裕美が僕に尋ねた。

「うん」僕は首肯した。「よく読むよ。最近は馬鹿みたいに読んでる。小説に限らず、SFが好きだけどね。映画や漫画でも……」

「へえ」と、彼女が興味深げに頷いた。

それからしばらく、僕は少々調子に乗って、いままで読んだSFのどれそれがよかったとか、どんなSF映画が素晴らしいとかを、彼女に解説していった。きつと摂取したアルコールが、僕を普段よりも饒舌にしているに違いない。なにしろ、いま僕がいるのは知り合いなど誰もいない旅の土地であり、時間もたっぷりあるのだ。決定的なことには、僕の目の前にいるゆきずりに出会った美人の女のコが、この一般受けしないSFについて興味を抱いているのだ。

僕が言葉の出るのに任せて話しているあいだ、彼女はにこにこしながら、興味深げに何度も相槌を打ってくれた。彼女はとくに、タイムトラベルなど、時間をテーマにしたものに関心があるらしい。

「武田さん、ひとついいですか？」

僕の舌が一段落着いたとき、裕美がすこし真剣な顔になって言った。

「なんだい？」

「それだけSFが好きだってことは、突拍子のない話には慣れているってことですよね？」

「そりゃあ……」僕の脳裏にひとつ疑問符が浮かんだ。「まあ他人よりは、そうだと思うけれど……」

裕美がなにを意図してそんなことを言っているのか、僕にはさっぱり予想がつかなかった。それどころか、その彼女の問いかけにやや挑戦的なものを感じて、僕はたじろいってしまったのだ。

彼女は卓上にひじを置いて身を前にすこし乗り出すと、顔を僕に近づけた。大きな瞳が、じっと僕の目を覗き込んだ。

「じゃあ、信じるか信じないかは別にして……聞いてみます？ わたしの話」

裕美は姿勢を戻すと、一度ゆつくりと目を瞑った。そして、僕の答えを待たずにゆつくり

と話しはじめた。

「さっき武田さんの話してくれた、いくつかの時間旅行の物語——『夏への扉』に『ふりだしに戻る』『バック・トゥ・ザ・フューチャー』——主人公が未来へ行ったり、過去に戻ったり……」

まるで独り言のように話す彼女に、僕は黙ってゆつくりと頷くしかなかった。

「わたし……」彼女は言葉を切って、僕の目をじっと見つめた。「未来から……、いまから三十年後の西暦二〇二八年の世界から来たんです」

突然に発せられた彼女のそんな言葉に、僕はどう反応してよいやらわからなかった。三十年後の未来から来たただなんて、酒の上の冗談かとも思っただけで、しかし僕を見つめる裕美の眼に嘘の色は見当たらなかったのだ。

「それは……まさか」僕は、やつとの思いで問うた。「君はタイムマシンでここに……つまり、この時代に来たと言うのかい？」

裕美は首を縦に振った。

「武田さんは、『時間』ってどんなものだと思います？」

「え？　そ、そうだなあ……」思いがけない問いかけに、僕は一瞬とまどった。「僕は、時間というのは一本の河のようなものじゃないかと思っている。上流から下流へ、つまり過去

から未来へ向かって一直線に流れている水のような存在なのじゃないのかな」

「惜しいですね」

裕美は微笑んだ。いつの間にか、先ほどの挑戦的だった表情は消えて、見慣れたやさしげな表情へと戻っていた。

「時間ってね、“波”なんですよ」

「波？」

「そう、波。刻一刻と、ある規則性に沿って変化する波なんです。わたしたちはそれを“タイム・ウェーブ”と呼んでいます」

「わたしたち……？ 君はいたい……」

「あ、わたしは工科の大学院生です。とはいえ、わたしは通っている大学の教授の研究を、ただ手伝っているだけなんですけどね」

なんと。ということは、彼女は少なくとも僕より年上ってことじゃないか。いや、問題はそこではない。時間は波……タイム・ウェーブ？ 僕はこれまでの人生において、そんな言葉など聞いたこともなかった。

「それで、そのタイム・ウェーブというのは、その、なんというか……なに？」
「簡単に言うと、ラジオの周波数みたいなもの——かな。」

武田さん。どうして人間や動植物、石や土などが、時間の経過と共に存在していると思います？ それは、地球上にあるもののそれぞれが、生物であれ無機物であれ、タイム・ウェーブに同調しているからなんです。ちょうど、ラジオの周波数を合わせるみたいに。体内時計、なんてよくいいますが、それも人体が無意識のうちにタイム・ウェーブと同調しているからにほかなりません。そして、このタイム・ウェーブの性質を利用して時間の壁を飛び越えるんです。

先ほども言ったとおり、タイム・ウェーブはその変化に、ある一定の規則性があります。過去から未来へ向かって、ゆっくりと流動的にその波のパターンを変動させ、かつ同じ波のパターンが二度と現れることはありません。そしてタイム・ウェーブは、人間の編み出した——あるいは、それは必然だったのかもしれませんが——時間における約一分ごとに起こっています。この規則性から過去あるいは未来のタイム・ウェーブを予測計算し、俗にいうタイムマシンの行く先、つまり移動時間先を設定するんです」

僕は彼女の話についてゆこうと、必死に頷いた。

「では、本題」彼女はここで、僕に左手首を見せた。「これが、タイムマシンです」

そう言って彼女が指差したものは、シルバーに輝く金属性の腕時計だった。少なくとも僕の目には、それは腕時計にしか映らなかった。

「この、なにやら腕時計らしきものは……」彼女は続けた。「たしかに腕時計です。ただ、これには特殊な改造が施してあるんです。ではこの腕時計型タイムマシンは、いったいどういう仕組みか」

彼女は手を戻すと、ビールをひと口飲んだ。僕もなんだか喉の渇くような気分だったが、手をつけなかった。それよりも、彼女の話の続きが気になってしょうがなかったのだ。

「時間を移動するためには——」裕美は再び語りはじめた。「行きたい時間のタイム・ウェーブに自身を同調させる必要があります。そこで、このタイムマシンは移動先の時間を設定すると、装着者とその肌に触れるもの——つまり服とか、手に持った鞆など——を目には見えない膜で包み込むんです。わたしたちはこの膜を“タイム・ウェーブ膜”と呼んでいるのですが、このタイム・ウェーブ膜は、マシンが設定したその時間のタイム・ウェーブのパターンへと自身を同調させることが可能なんです。そして、この設定時間のタイム・ウェーブのパターンに同調した膜に包まれた装着者は、その時間へと移動することができるというわけです」

「しかし……」そこで僕は矛盾点を見つけた。「もしそうだとすると、たとえば鞆を持ってタイムトラベルしたとして、その設定時間に移動したあとで手から鞆を離してしまえば、その鞆は元いた時間に引き戻されてしまうのではないのかい？」

「そう来ると思いました」彼女はにっこりと笑った。「時間を移動する——つまり、自分のいる時間とは別のタイム・ウェーブに人工的に同調するというのは、いわばきつかけなんです。ラジオだって、つまみを回して自分の聞きたい局に合わせてしまえば、もうそれ以上つまみを回す必要はないでしょう？ それと同じで、いったん時間を移動しさえすれば、あとは勝手に自分の身体や手荷物が、その時間のタイム・ウェーブに同調してくれるんです。そして、元の時間へ帰る際、もしくはその時点から別の時点へと移動するときだけ、タイムマシンを起動すればいい」

「……なるほど」

僕は思わず納得してしまった。だとすれば、彼女の持っていたあのぎゅうぎゅう詰めのナツブザックや、浴衣に着替える前に着ていた服が、彼女の肌から離れても存在することにつじつまが合う。

「それじゃあ君は、いったいこの時代になにをしに来たんだい？」

「別に目的があるわけではないんです。ランダムに選んだ時間に、試験的に来ただけで……。だから、マシンのテストが、目的といえれば目的です。そのテストの被験者に、アミダで当選しちゃって」

「なら君のいる時代で、タイムマシンが一般化しているわけではないの？」

「ええ。まだ実用化もされていません。中西先生——あ、さっき言った教授のことです——が発見したタイム・ウェーブとそれにまつわる理論も未発表です。つまり、わたしがいま着けているのが、人類初のタイムマシンということになります」

僕は、もう一度彼女の左手首にあるその腕時計を眺めた。なんの変哲もない、金属製の腕時計——これが、タイムマシン第一号とは……。

「でも、いくらテストだからって、すぐに帰っちゃうのもつまらないし、せつかく三十年も昔に出かけるのだから、過去の空気も楽しもうと思って、温泉に浸かりに来たというわけです。あちらで指定した時間に帰ってしまえば同じことですからね」

彼女はいたずらっぽく、舌をちよつと出して笑った。

「それと、実はこのタイム・ウェーブは地球上だけでのことなんです」

「というと、まさか地球外は無時間だとも……？」

「いえ、そうではなく、つまり宇宙空間や月にもタイム・ウェーブはあるんですが、パターンがそれぞれ違うのではないか、ということが最近——まだ推論の段階ですが——わかってきたんです」

「じゃあ、仮に月面でその腕時計を身に着けて、タイムトラベルの手順を踏んだとしたら……」

「時間移動は不可能です」裕美は首を横に振った。「というのも、この腕時計は地球上でのタイム・ウェーブの観測値に則ってデザインされていますし、そもそも地球外の計測データがないんです」

「なら、どうして地球の内外でタイム・ウェーブが異なると？」

「それは、地球のタイム・ウェーブが、地球のバイタル・サインでもあることが判明したからです」

「……どうということだい？」

「タイム・ウェーブを特殊な装置によって視覚化してグラフにします。そして、その観測結果を時間に沿って見てゆくと、グラフの振幅しんぷくの最大値が、どんどん——といっても、これまた微弱な変化ですけれど——小さくなっているんです。オシロスコープによって音波を視覚化したとき、大きな音量から小さな音量へと音を変化させると振幅が小さくなりますよね。それと似た変化が、タイム・ウェーブでも起こっているんです。タイム・ウェーブの予測値をこれに当てはめると、過去に遡さかのぼれば遡るだけ最大振幅値は大きくなり、逆に未来に向かえば向かうだけ最大振幅値は小さくなる。そして、ある時点でタイム・ウェーブ自体が消失するんです。つまり……」

「そこで地球の寿命が尽きる……」

「そうです。そして、タイム・ウェーブが消失する時期は、これまで予想されてきた地球の惑星寿命とおよそ一致しているんです」

うーむ、と僕は唸った。

「きっと、宇宙がはじまった瞬間のタイム・ウェーブは、現在——つまり二〇二八年現在——の機器では、計測も計算も不可能なほどの、とてつもなく巨大な波が寄せては返しているのですね」

裕美は感慨深げに言うと、部屋の窓を見やった。窓に切り取られた夜空に、小さく三日月が浮かんでいた。

なんとまあ……。たかが感傷旅行の旅先で、未来人に助けられる羽目になろうとは夢にも思わない。僕は腕を組んで、もう一度「うーむ」と唸った。

すると裕美は、口に手を添えて「ふふっ」と含み笑いをした。そして、グラスに残っていたビールを飲み干すと、机の上に戻したグラスを人差し指でもてあそびはじめた。

「どうですか？」裕美は、いたずらっぽく目を細めた。「SFファンとしては、こういう話嫌いじゃないでしょう？」

「え……？」僕は、彼女の言葉が理解できなかった。

「即興で作ったにしては上出来だったでしょう？ どうでした？」

僕はあつけにとられてしまった。

「……すると、いままでの話は全部フィクションなのかい？」

「いやだ、本当に信じたんですか？」

「いや……」

僕は咄嗟に否定しようとして、やめた。そして、僕が「うん」と頷くと、彼女はポップコーンがはじけたように笑い出した。

「最初に、信じるか信じないかは別にして……って断ったじゃないですか」

そのまま彼女は、しばらくお腹を抱えてコロコロ笑っていた。

そのときになってようやく、僕は目の前にいる彼女の、食後の暇つぶしの相手にされていたことを知ったのだ。僕はなんだか、フワリフワリと浮遊するような気分になって、自分のグラスに残っていたビールをちよびちよびと飲んだ。いやな気分はしなかった。むしろ、大いに楽しかったのだ。嘘っぱちとはいえ、彼女の口から語られたそれは、自分を十二分に楽しませてくれたのだ。SFとはそもそもこういうものである、と僕は思うものである。

「ごめんなさい、こんなに笑ったりして。でも、本当に信じるなんて思ってたから」
裕美は、目に浮かんだ笑い涙を指でぬぐいながら言った。そして、空になっていた僕のグラスにビールを注いでくれた。

「いやあ、僕も楽しかったよ」

僕がそう言って笑うと、彼女も一緒になって、しばらくふたりで笑い合っていた。

それから、彼女はにわかに多弁になり、お互いにいろんなことを語り合った。好きな作家やお薦めの書籍、ポップミュージックに映画、これまでの人生の思い出話などなど話題は飛躍に飛躍を重ね、僕らはそんな他愛のないことを飽きることなく喋ったのだ。それでも、その時間はあまりに楽しく、それこそ時間の流れが静止したかのように感じたものだった。

机の上にビールの瓶が樹立し、スタジオ・ジブリの話題が佳境に入ったとき、裕美が立ち上がった。

「すこし飲み過ぎちゃった。ちょっと、お手洗いに行ってきます」

そう言って彼女は、小走りに部屋を出て行った。

ひとりになった僕は、部屋の壁に掛けてある時計に目をやった。時刻は、もう午後十一時をまわらんとしていた。

「ふう」と軽く息をつくのと、酔いが回っていたこともあって、眠気が急速に僕の意識をぼやかしはじめた。せめて彼女が帰ってくるまではと、僕は眠気に抗ってみたが、その抵抗もむなしく、僕は気持ちのよい暗黒へと引きずり込まれていった。

目が覚めると、僕は掛け布団のなかにいた。見慣れない天井が僕を見下ろし、蛍光灯では

なく陽の光が部屋を照らしている。すこしずつ昨日の記憶が蘇ってきて、僕は布団のなかで大きく伸びをし、あくびをした。それから寝ぼけ眼をこすりつつ、おずおずと布団から這い出して起き上がった。

部屋を見回してみると、僕はひとつの異変に気がついた。裕美がいなかったのだ。トイレにでも行ったのだろうか。しかし、彼女のナツプザックも同時に見当たらなかった。あのぎゅうぎゅう詰めのナツプザック。

こんな朝早くどこに行ったのだろうかと思いながら、僕は腕時計を見た。

「うわっ」

と、思わず飛び上がった。朝早くなんてものじゃない。時刻はすでに午前十時になりつつあった。

慌てて立ち上がったとき、もうひとつの異変に僕は気がついた。机の上に、僕の『夏への扉』が置かれていたのだ。昨日、リュックサックにしまったはずだ。なのにどうして……。

僕はそれを手に取った。すると、ページの合間に、自分の挟んだ葉とは別の紙切れがあるのが目に入った。

その紙切れを引き抜いてみると、そこにはこう書かれていた。

Good morning!

Good-Bye!

YUMI

僕はそれを見るなり、慌てて部屋を飛び出した。と、そこにちょうど女将がいた。

「あら、お目覚めになりました？」女将は、急に僕が飛び出してきたので、少々驚きながら言った。「お姉さまなら、今朝早くにお発ちになりましたよ。いくら起こそうとしても起きられないので、ゆっくり寝かせておいてやってほしいとのことだったので。きつと旅の疲れが出たのでしょうか……。先に行つて、次の目的地で待つていると、おっしゃっていましたよ」
「そうですか……」

僕は力なくそう答えた。

「あの、朝食はどうなさいます？ おにぎりかなんかでしたら、すぐにでもご用意しますけど」

「はあ、すみません。ご迷惑をかけてしまつて」

僕は、寝癖だらけの頭を下げた。

「いえいえ」女将はにつこり笑つた。「それじゃ、すぐにお持ちしますね」

そう言つて女将は御辞儀をしてパタパタと駆けだそうとして、またこちらに戻つてきた。「そうそう、これをお渡ししようと思つて」女将は僕にあるものを渡した。「もしか、お姉さまのものではありませんか？」

それは、あの紫水晶だった。

「え、ええ」

「そうですか、やっぱり。昨晚、お風呂の脱衣所のかごで見つけたのです。お姉さまに渡さう渡そうと思つて、すっかり忘れておりまして。どうもご迷惑を……」

「いえ、そんな……。こちらこそ、どうもありがとうございます。あの、ちゃんと渡しておきますので」

「よろしくお願いいたします。それではまた……」

女将はもう一度、小さく御辞儀をすると、やつてきた廊下をパタパタと駆け戻つていった。部屋に戻り、戸を閉めると、長いため息が漏れた。彼女に僕を待つ理由なんてないのである。それは当然のことだ。彼女には彼女の、僕には僕の旅路があるのだ。

しかし、心残りといえれば心残りである。

ゆきずりの僕に宿を奢つてくれ、挙句に彼女は旅の疲れが出た僕のために、わざわざ宿の人に僕を休ませてくれるように頼んでくれたのだ。最後の最後まで、僕に気を遣つてくれた

——そんな彼女に、僕はひとつの恩返しもできずじまいになってしまったのだ。

それに、僕は彼女にこの紫水晶を返す術もないのだ。“ちゃんと渡しておきます”だって？ そんなこと無理だというのに、僕はなにを言っているのか……。

「短い夢だったな」

僕は、ひとり呟いた。

裕美と女将の計らいによって、ありがたくもありつけた遅い朝食を済ませると、僕はそそくさと荷物をまとめて旅館をあとにした。

秋晴れの空は青く澄んでいたが、どことなく淋しさを感じさせた。村のバス停までの同じ道を歩いていながら、そう感じてしまったのは、僕の前を颯爽と進む人影がないからだろう。考えてみれば、この旅の大部分は僕ひとりきりであったのだから、単に元に戻っただけなのだし、彼女の素性も結局よくわからずじまいだったのだ。昨晩と今日の状況的差異の振れ幅は、そう大きくはないはずなのに、なんとも不思議なことである。

やがてやってきたバスに揺られながら、僕はうつらうつらしながら車窓を眺めて過ごした。バスは、ゆつくりと山道を越えて小さな町へ降り立ち、一時間半ほどで目的のＪＲ駅にたどり着いた。

駅の時刻表を見ると、アパートの最寄り駅まで僕を送り届けてくれる列車の到着までにい

ささか時間があつた。そこで、僕は昼食を採ろうと、近くにあつたうどん屋に立ち寄つた。店の奥のカウンター席に座ると、僕は一番値段の安かつたきつねうどんを注文し、それが運ばれてくるまでのあいだ、店に置いてあつた地方新聞になんとなく目を通した。

その紙面で、僕は信じられない記事を目にしたのだ。記事自体は小さなものだったが、それは僕の目に焼きついて離れなかつた。

その記事には、こうあつた。

“——昨日午後七時三十分ごろ、〇〇町*交差点で、最終便のM路線バスに信号無視の大型トラックが衝突する事故が起つた。

幸いにも事故発生時、バス内に乗客はおらず、またトラックが衝突したのがその無人の客席部分だったため、そのバスの運転手に怪我はなく、トラックの運転手も軽傷で済んだ。警察は現在、このトラック運転手に事情を聞いている——”

なんと記事にあつたバスとは、僕が乗ろうとしたバスだったのだ。そして、その文面のそばに掲載された写真には、中央部が無残にも窪^{くぼ}んだバスが写っていた。見紛うはずもない、あの——そしていまも乗ってきた——アナクロなオレンジ屋根のバスである。

もしも昨日、僕があれに乗っていたら、きっと大怪我では済まなかったに違いない。死んでいたっておかしくはない。

結果として、僕は彼女に生命まで救われていたのだった。なんという偶然、なんという運命の悪戯だろう。そして、なんというむなしさ。僕はもう、彼女にひと言の礼を言うことすらできないのだ。

僕は力なく新聞をたたむと、長く深いため息をついた。

○

三十年という月日は、人間の性格も容易に変化させてしまうものだろうか。彼女との、いろいろな偶然の折り重なったあの日の出来事から、それだけの歳月が流れてしまったのだ。

僕自身は、なにも変化はないように思う。

しかし、その三十年間に、同時多発テロが起き、幾度も震災があつた。原油高は高騰、国内外はキナ臭く緊張し、僕らの暮らす世界は情勢も技術も生活も、ますます複雑になった。僕を取り巻く環境はというと、あれから大学をなんとか卒業し、高校の英語教師になった。大学を卒業するまでに失恋をもう一度経験したのち、同じ学部にいた娘との恋を成就させた。

SFは読まないけれど魅力的な女性で、三年後に結婚した。僕が二十六歳になった頃、女の子をひとりもうけた。しかし、それから四年も経たないうちに妻は病に倒れて亡くなり、次いで両親も順に亡くした。そして僕は、男手ひとつで娘を育て上げた。

これが、僕の大まかな三十年間である。

それでも、きっと僕は本質的には、なにも変わっていないはずなのだ。いろいろな苦勞にも追い立てられたが、相変わらずSFは好きだし、山下達郎の音楽も聴き続けている。そして、僕の先天的優柔不断と、それに付随するひより癖や緊張しいも、ちつとも直っていない。でも、それでいいんじゃないか……と思う。あの三十年前に出会った彼女のことも、ふつとたまに思い出しては、結局あのまま持ち帰ってダンスにしまった紫水晶を懐かしさにづられて手に取ってみることもある。

「グッド・モーニング！ グッドバイ！ ユミ」

彼女の残していったメモも、僕の『夏への扉』に挟まったままだ。しかし、当時としてはあれだけ印象的だった彼女の大きくて知的な瞳も、いまとなつてはすっかり忘れてしまった。あの日の出来事も、なんとなくしか思い出せない。すべては、思い出と忘却の彼方に過ぎ去ろうとしていた。

梨奈と名づけた僕の娘は、幸いにして父親に似ず、優秀でしっかりとした人間に育ってく

れた。今年で二十四歳になる娘は、いまは家を出て、隣の市の大学院に通っている。ただ、早くに妻を亡くしてひとり暮らしの僕を氣遣ってか、ちよくちよく僕に顔を見せに来てくれる。

先々週の日曜日にも、梨奈は家に帰ってきて僕と昼食を共にした。僕が、週末を過ごす相手がほかにいないのかと尋ねると、笑ってごまかしていた。

そういえば、あいつはなにを研究していると言っていたっけ……。

ひさびさに休みになった土曜日、僕は縁側の椅子に座って、ふとそんなことを考えていた。ときおり梨奈に尋ねてみるのだが、梨奈は「お父さんは文系だから、話しても判らないよ」と言っていて、あまりそのことについては話してくれなかった。

ただ、このあいだ彼女が家に帰ってきたとき、めずらしくそれ関係のことをちらりと口にしたような気がしたのだ。たしか、な……な、なにがし……いや、中西とかいう教授の下について、時間理論についてどうのこうの、と言っているいなかったか。そして、一、二週間後に実験をするとかしないとか……。

初冬の冷たい風に、縁側のガラス戸がカタカタと鳴った。

あれ、中西……？　いつぞや、どこかで聞いたことがあるような。あれはいつだったかなあ、えーとお……。

僕はひとしきり悩んだ挙句、唐突にそれを思い出した。

「あつ！」と声を上げた瞬間、玄関の呼び鈴が鳴った。次いで玄関の戸が開く音が聞こえた。

「お父さん、ただいま」

梨奈が訪ねてきたのだった。

「ああ」と、僕は玄関に向かって返事をした。「上がっておいで」

「はあ、寒かった。冬ももう本番だね」

そう言いながら、梨奈は僕の前にやってきて、にっこりと僕に笑いかけた。その笑顔を見て、僕はすべてを悟ったのだ。

僕の目の前には、あの香月裕美が立っていたのだ。

「……コーヒーでも飲もうか？」

そう言って、僕は椅子から立ち上がろうとした。

「いいよ。わたしが淹れるから」

「じゃあ頼むよ」

梨奈は頷いて、コートとマフラーを脱ぐと、台所へ向かった。僕はその後ろ姿を見届けてから、立ち上がって奥の部屋のタンスへ向かうと、その一番上の棚を静かに引き出した。そこからあの紫水晶を取り出すと、それを持って台所へ向かった。

そして、コーヒーの準備をしている梨奈の背中に、僕はこう声をかけた。

「あの旅館……妙得庵で食べた山菜おこわは、おいしかったなあ」

梨奈の動きが止まった。

「おかげで、命拾いしたよ」僕は長年のあいだ彼女に言えなかった礼を言った。「ありがとう」すると彼女は観念したかのようにくるりとこちらを向いて、いたずらっぽい笑みを浮かべた。そう、三十年前のときのように。

「当然でしょう？ そのために行ってきたんだから」梨奈は降参とでも言うように両手を軽くあげた。「とうとうバレちゃったか」

「ほら、忘れ物だよ」

そう言っ僕は手に持った紫水晶をひよいと投げて渡した。

「あ、これ。やっぱりあつち、に忘れてたのね」梨奈はそれをすこしばかり眺めると、そっと台所の机の上に置いた。「ありがとう、お父さん。とっておいてくれたんだ」

それから梨奈は、コーヒーの準備に手を戻した。

「それにしてもお前、どうしてあの日、僕が事故に遭うバスに乗ろうとしていたことを知ってたんだい？」

僕は、台所の椅子に腰掛けながら聞いた。

「いつだったか……そう、わたしが高校に入ったばかりのとき、一度だけお父さん、ベロンベロンに酔っ払って帰ってきたことがあったでしょう。そのとき、詳しく話してくれたじゃない。日時から場所から、どんなバスでそこから誰それが出てきて、もう一から十まで全部。覚えてない？」

「ああ、全然覚えてない。そんなことがあったかなあ」

「あったの。あんまり詳しく話すものだから、あとになって調べてみたら本当にそんな記事があるんだもの……。それで、最近になってタイムマシン試作機が完成して、ふっと思い出したの」

「じゃあ、あのときの話——タイム・ウェーブや時間移動の理論は、すべて事実だったのか……」

「そっ」梨奈は両手にコーヒーの入ったカップをふたつ持つて振り向いた。「だから話す前に、信じるか信じないかは別にして断つたでしよう？」

僕はなんだか気の抜ける思いがした。

「薄々、わたしが助けるんじゃないかっていう予感、試作機のテストに志願したときからあったわ」梨奈は僕の前にコトンとコーヒーを置くと、自分も向かいの椅子に座った。「それにしても、お父さんって昔からああなのね。土手に落っこちたわたしの心配ばかりして、

その日最後のバスに乗り遅れるなんて。なんだか安心したわ」

「じゃあ、あの香月裕美という名前は……」

「わたしの友達の名前を借りちゃった」

「しかし……なぜ、そんな危なっかしいことをしたんだい。過去に出かけて僕を助けるだなんて」

「だって、お父さんに死なれたら困るじゃない。わたしだって生まれなくなってしまうし、それに……」

梨奈は、コーヒーをコクリとひと口飲んだ。

「すこしでも、恩返しがしたかったの。お父さんに……」

梨奈は、僕のかわいいひとり娘は、やさしげに微笑んだ。

僕はなんとも言えず、うれしくなった。とても、うれしくなった。そして、思わず顔から笑みが漏れた。それを悟られるのがなんとなく恥ずかしくなった僕は慌ててコーヒーをすすると、ひとつ憎まれ口をたたいた。

「しかし、いま思えば、僕の『夏への扉』に挟んであったあのメモ……。あれ、梶尾真治のバクリだろ」

「いいでしょう、別に。咄嗟に思いつかなかったんだもの。それに、あれはオマージュです」

梨奈は怒ったように頬を膨らませたが、目は笑っていた。

「ねえ、お父さん」

「ン、なんだ？」

「あの『夏への扉』を貸してくれない？　なんだか、読んでみたくなっちゃったから」

「……もちろん。いいとも」

「ありがとう。お父さん」

梨奈は、うれしそうになっこりと笑った。

○

夕陽が町並みに沈みゆくなか、梨奈は駅に向かって歩いていった。土手沿いの遊歩道をあとすこし行つて、この先に見える大橋を渡れば、すぐ駅だった。彼女は、三十年の時間差を経て手元に戻ってきた紫水晶を軽く投げ上げては掴み、投げ上げては掴みしながら歩いた。まだ次の電車まで余裕があったので、実にのんびりとした足取りだった。

昨日のタイムトラベルで、今日バレーしてしまうとは……。ずいぶん早いような気がするけれど、よく考えてみれば、お父さんは気づくの三十年かかったわけだ。なんだか不思議な感

じがする。それよりも、お父さんが変わらず元気そうでよかった。寒くもなってきたし、風邪でも引いていないかと心配していたのだ。

そんなことを考えながら歩く梨奈のそばを、ふいに木枯らしが吹き抜けていった。そのあまりの冷たさに彼女が身震いしたとき、オレンジ色に染まった風景のなかを、ひらりとなにかが舞い降りてきた。彼女は立ち止まって空を仰ぎ見た。

「あ、雪……初雪」彼女はもう一度、肩を小さく震わせた。「どうりで寒いわけだ」

雪は白く輝きながら風に乗り、夕陽と影が織り成すモノトーンの町並みのなかをひらひらと優雅に舞った。

「積もるのは、まだちょっと先かな……」

梨奈はその景色をすこしだけ眺めると、また歩きはじめた。知らぬうちに、歌を口ずさみながら。

「——心には冬景色　輝く夏をつかまえよう　だからリツキー　ティツキー　タビー　その日まで　おやすみ——」

